

村コミュニティの映像情報のデジタル化による共有化と共同利用の研究

代表研究者 原 田 健 一 新潟大学 人文社会・教育科学系人文学部 教授

1 研究調査の目的

映像メディアが日常生活のなかへと普及し、われわれの記憶や心の領域にまで浸透し、内面化していることはよく知られている。本研究では地域という準拠枠を設定し、第一にこうした日常生活においてメディアが生み出すイメージや表象の場の実態を明らかにする。

ところで、近代以降、映像メディア（写真）が移入されてから、人びとは自ら「写し、写され、その映像を見る」関係性を、自分たちの生活の日常を支える関係性である家、仲間、コミュニティのなかに取り込むことで、メディアが生み出した新たな関係性を加え重層化させていった。これらの映像メディアが生み出す関係性は、そのままメディアがもつシステムとして、ローカルでありながらグローバルな構造をもち、そして同時に、それは私たちの心の領域、記憶を形成し、時に創発する場となっていた。今日の電気通信の発達、デジタル化の波は、こうしたメディア状況をさらに拡大化させ、活発化させるものである一方で、われわれの日常生活を支えるコミュニティの地域性を弱めてもいる。本研究の第二の目的・意義は、地域のコミュニティに蓄積された映像をデジタル化し、共同で再利用できるようにするための方策を見つけることである。

本研究では、この二つの目的を実現するために、映像を実際に発掘、デジタル化し、現地調査を行い、その内容を分析し共有化するための理論と分析視角を明らかにする。

2 地域、メディア、アーカイブを結ぶ

2-1 中間的コミュニケーションと映像メディア

映像がメディア化され写真、映画、ビデオといったモノになったのは、近代に入ってからである。映像の登場によって、人びとの日常生活に、写すものと写されるもの、そして、その映像を見るものという新しい人と人との関係性が生み出されることになった。また、映像は手元に置けるモノになることで、人びとの記憶を外在化し、一つの装置として社会的な役割を果たすことにもなった。

ところで、従来、映像というものを考えるとき、マス・コミュニケーションである映画や放送などの誰が見て分かるような一般的な解釈コードが付けられた映像や、芸術的な表現性をもった写真などの映像が扱われてきた。そうでないものという、パーソナル・コミュニケーションの領域にあるプライベートな家族写真といったものが考えられてきた。

しかし、「地域」という枠組みで、実際に、映像を発掘・調査してみると、マスとパーソナルな間の中間領域にある地域の行政や市町村のコミュニティに関わる映像が膨大にあり、しかも、それらは、あちらこちらに遍在し堆積し、人びとの生活や文化を維持する網目を織り上げていることが分かってきた。つまり、町や村の生活において道路や上下水道、電気などが必要なように、映像もまた同じように文化や記憶のインフラストラクチャーとして必要とされていた実態が分かってきた。つまり、社会において、中間的コミュニケーションとしての映像があることで、マスとパーソナルな世界をつないでいたことが明らかになってきたのだ。

また、通常、映像には、生きていた人やものの個別性、痕跡がどこかに含まれている。それらは、写された人やものを知らない人にとっては、意味不明な要因となる。こうした一般化しないものを含んだ映像を近年の映像研究ではヴァナキュラーなものと呼んでいる。そして、問題にされるべき日常生活のマスとパーソナルをつなぐ中間的コミュニケーションの映像は、マスのように一般化されておらず、とって家族のように特定しにくい映像として、まさにヴァナキュラーなものとして現れることも分かってきた（原田, 2013）。

2-2 日常生活世界の映像の集合化

2000年代に入り、映像のデジタル化という大きな趨勢、技術的な展開のなかで、「地域」で「映像」と「アーカイブ」を結合する研究方法は目新しい方法ではない。しかし、そもそも日常生活に遍在している映像と

はどういうものなのか、人びとが映像をどう日常で利用し、生活しているのか。実際に調査し、集合化してこなかったことも確かであった。日常生活における映像を集積し、比較検討するアーカイブの手法によって、これまで十分に研究されてこなかった社会におけるさまざまなコミュニケーションのなかで映像がどう普及し、利用されているのかを、実証的に明らかにすることが研究的に可能になった。私たちは、まず、日々の暮らしなかで利用しているなんでもない氾濫する映像に何があるのかを、調査することから始めてみる必要があるのだ。

人びとの日常生活を捉えるために、日常生活を考えるための道具として映像を扱うという考え方は、日常生活批判としての映像研究へと導いていく。それは自覚していない当たり前だと思っている日常生活のさまざまな行為、あるいはそれを支えている意識を自覚的に捉え直すことでもある。映像の内容を分析し、単に生活や世相の変遷を見るだけではなく、映像を通して日常生活、社会に生成する意味や意識、感情といったものを対象化するところまで研究を進める必要がある。

ところで、映像は写された内容において空間的なものが意識されるが、物質化した映像は時間軸に沿って社会的に展開する。通常、映像はモノ化したものとして、過去の現実を再現するものとして捉えられる。映像がもたらす過去の記録、写された文化、習慣やしきたりといったことが重視されれば、歴史学や民俗学の資料の一つとして捉えることができる。通常、過去の映像が研究の対象になるのはこうした文脈である。

それに対して、こうした過去がモノとなることで、現実社会に何らかの形で機能していることを捉えると、社会学・文化人類学的な観点になる。人びとの記憶は、日々、現在進行形で記憶が構築されている。映像はこうした再構築において、常に参照されるメディアとして現実に関わり、時に動かしていく作用がある。

さらに、メディアが社会にいかに関与を与えるかという観点から映像メディアを捉えることもできる。これはメディア研究の視点となる。重要なのは、映像を写すことではなく、映像を残すことに社会的な意味があり、そのことを通して、さらには活用されることを通して、新たな社会のデザインが創発されることにある。この場合、何を、いかに、どう残すかが重要となる。

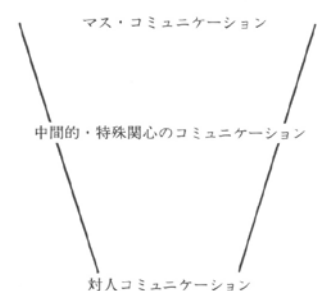
こうした映像研究の領域の細分化は、社会における複合的な映像のあり方を総合的に捉えることを見失わせる。モノ化されたメディア化された映像は、過去・現在・未来の3つの異なった時間軸を内包している以上、それに見合うように研究領域も複数にわたる。また、それが媒介している社会の複雑なマスとパーソナルの関係だけでなく、その中間にあるコミュニケーションを捉えるためには研究領域を越境し、横断的な研究を進める必要があるのだ。ここでは、マス・コミュニケーション研究と村落社会学の理論的な枠組みをもちいて枠組みを設定してみる。

3 マス・コミュニケーション研究における研究的枠組み

ここで、マス・コミュニケーション研究、あるいはメディア研究において、こうした問題がどう捉えられてきたのかをみておこう。

マス・コミュニケーションの理論研究を日本において主導した岡田直之は1988年の論文で、マス・メディアが社会の中枢神経系的な役割を果たしているとしつつも、1980年に山形市で行われた情報行動の調査を例にしながら、「マス・メディア以外の多種多様なコミュニケーション・メディアが現代社会の錯綜したコミュニケーションの網目を形づくっている」(岡田, 1992, 3) ことを改めて意識する必要があるとした。そして、マス・コミュニケーションとパーソナル・コミュニケーションの二つのカテゴリーだけでなく、その間にある中間的コミュニケーションを積極的に位置づける必要があるとする。そして、G・D・ウィーベを引き、コミュニケーションの受け手が量的に拡大するにもなって、対人コミュニケーションから中間的・特殊関心のコミュニケーション、さらにマス・コミュニケーションへと転化していくコミュニケーションの連続体があるとする。それは、パーソナルな対人コミュニケーションからマス・コミュニケーションへと移行するにつれて、「(1) 送り手当たりの受け手の比率が漸次的により大きくなる、(2) 伝達されるメッセージの性質がだんだんと私的なもの特殊なものではなく、ますます公共的で一般的なものになる、(3) コミュニケーション内容の多様性の範囲がしだいに狭まる、(4) 受け手がただちに関心を示すことがだんだんとむずかしくなり、関心を引き起こすように刺激を与えてやらなければならない、(5) コミュニケーシ

図1 コミュニケーションのV字型モデル



(岡田, 1992, 5)

ョンの受け手は一般に送り手にすぐに近づきにくくなる」(Wiebe, 1955, 163~164: 訳岡田)とした。この指摘はマス・コミュニケーションの特徴をよく説明するものであるが、同時に、ヴァナキュラーなものの特徴をもよく示している。つまり、相手を想定できる範囲にしたがって、伝達されるメッセージは私的で特殊なものでよく、また相手を知りその関心領域の幅が分かっている分、多様な要素を含んでいても理解が可能なものとなる。当然のことながら、コミュニケーションの相手として想定されていない人びとにとっては、往々にしてそのことは分かりにくい原因となる。

そして、その中間的コミュニケーションの領域として、林進を引き「(1) 自治体や住民団体などの組織によっておこなわれる地域コミュニケーション、(2) サークル、市民団体、企業、組合、PTA、政党などの組織によっておこなわれる地域コミュニケーション、(3) 専門的関心に基づく専門コミュニケーション」(林, 1978, 22) があるとした。

岡田はさらにその 10 年後の 1998 年の論文で、1980 年代から 1990 年代に展開した能動的受け手論をめぐる論争を批判的に検討しつつ、受け手という概念の曖昧さを指摘し、その概念の基本はマーケット・カテゴリーに過ぎなかったと指摘する。そして、「受け手は日常生活世界において多様な社会関係や社会集団のネットワークのなかで相互に結合され相互作用を営んでおり、受け手のメディア行動もそうした社会学的視座のなかで考察されなければならない」(岡田, 2001, 188) とし、この誰でもが分かっていることから議論をする必要があるとした。

この提言は受け手が、対人コミュニケーションから中間的・特殊関心のコミュニケーション、さらにマス・コミュニケーションへと転化していくコミュニケーションの連続体のなかで浮動し、その局面々々でさまざまな姿をとって現れる存在であることを念頭においたものといつてよい。岡田はこうした実態を捉えるための鍵概念として「解釈コミュニティ」を、「政治集団・経済団体・労働団体などの伝統的な組織集団のみならず、知識人の知的共同体・女性団体・消費者団体・少数者集団・エスニック集団・NGOやNPOなどのリゾーム状の連鎖や提携を社会的基盤にして形成され、開かれた対等なコミュニケーション行為を媒介に共同主観的に構築される意味の生産・創造・変換の場」(岡田, 2001, 195) として設定すべきだとする。当然のことながら、これはそのまま中間的コミュニケーションの領域と重なる。

ここで、メディア研究の立場から日常生活世界、あるいは社会を研究する立場へと視点を移動し、捉え直しておこう。つまり、人びとがさまざまな集団やコミュニティに重層的に所属し、さまざまな社会的、文化的な参照系を保持しながら生きている。そしてメディアはそうした関係性を媒介にしていることで、マス・コミュニケーションー中間的コミュニケーションーパーソナル・コミュニケーションの連続体のなかで移動し複層的に関係性を重層化させながら、人びとをして視聴覚データを保持させ、選択させ、時に産出させながら、記憶や文化を多義的に再文脈化し再解釈することを行っている。こうした総体を「解釈コミュニティ」として捉えるとするならば、それは局面々々で「曖昧な」関係性をもった受け手・オーディエンスを、そのまま「曖昧な」まま掴まえようとする概念として設定することができる。

4 村落社会学の視座

4-1 村の構造

地域の中間的コミュニケーションを捉えるのに、まずその構成単位である町や村(コミュニティ)そのものがどう捉えられているのか、村落研究の成果をもとにして必要な範囲で整理しておこう。

日本の村落研究の端緒をなしている鈴木栄太郎は、村は集団や個人のいろいろな社会関係の集積であり、それらが相互に関係しあつた累積体であるとし、その大きさに準じて小さいものから第一社会地区、第二社会地区、第三社会地区を重層的に形成しているとした。その示すものは、第三社会地区は 1889 (明治 22) 年の町村制によって生まれた行政村を指す。そして、第二社会地区が大字とか部落とか呼ばれ、江戸時代からの村であり、第一社会地区はその村のなかで組とか小字とかさらに分かれていたものを指した。鈴木は第二社会地区の村こそ人びとの日常生活の中心をなすものであり、自律性を持ち「行政上の地方自治体やいわゆる聚落ではなくして、一つの自然的なる社会的統一である」(鈴木, 1968, 56) 自然村であるとした。そして、「集団が固定して存続すれば制度として個人を規制し、また社会関係も反復して一つの類型をなすに至れば、慣習としてやはり個人を規制する。それらはいずれも文化形象として個々の社会過程を制約する」とし、この自然村には「個々の社会過程を制約し、個人の行動・思惟・感情に一定の規範を与えている原則がある。それが精神である」とし、その精神は、「個人と現在を制御して全体と過去未来にしばりつける一個

の発展的規範」(鈴木, 1968, 123~126) としてあるとした。つまり、村の自律性、自主性はこうした相互に制約する自足性によって発展が可能となる組織だという。

4-2 村と家連合

有賀喜右衛門は村と町(都市)を共通した基礎的な立場から捉える必要があるとし、共通した形態として家の集合体に着目し、そこから村を捉えようとした。家は小さな生活集団であり、安定した生活を維持していくためには他の家となんらかの形で結びつく必要があるからだ。その必要性は、例えば、村の生活で考えれば田植えや収穫の作業、道路や用水などの維持管理、冠婚葬祭など一個の家だけではできないことが数多くあることから分かる。どちらにしても、そうした生活の必要に迫られた家々の集合が聚落となり、さらに集積したものが村や町となる。そこで、こうした家々の結びつきを家連合と呼ぶ。

有賀は、この家連合を類型化し、「同族団」と「組」があるとする。同族団とは生活上一つの家に他の家が依存する関係にあり、つまり上下に結合する家々の関係であり、本末の系譜関係に結ばれる生活集団である。それに対して、組とは家が対等平等の関係において結合する生活集団であり、それゆえに組を組成する家々の間には相互に系譜関係をもたない生活集団となるものとした(有賀, 1969, 176)。

ここで、家連合の基である家について、整理しておこう。家族は人びとの生活の基本的な単位の一つであるが、「家」は日本独特の個別性を含んだ家族のあり方を指している。家の特徴は、三つある。

- ① 家は家の財産としての家産をもっており、この家産にもとづいて家業を営んでいる一個の経営体である。
- ② 家は家系上の先人である先祖を祀る。
- ③ 家は世代をこえて直系的に存続し、繁栄することを重視する。

つまり、家は直系的に存続することを大切にすると、家の永続という願いのため、あるいは経営体として成り立つためにある一定の労働力を必要とするために、養子などによって非血縁の人間を取り込む。その意味で、家は必ずしも血のつながりや婚姻関係によって形成される親族で構成されなくてよいものとしてある(鳥越, 1993, 10~13)。

4-3 年齢階梯制と講組

次に、村において家を中心としない関係性として、年齢階梯制(年齢集団)と講組をみておこう。

年齢階梯制(年齢集団)

年齢階梯制とは、社会の成員を年齢によって区分し、何らかの社会的機能をはたすために階層化されたり、集団化されたりしているものである。日本の村においては、通常、子供組、若者組、中老組、年寄組に分けられる。

子供組は7歳前後に加入し、15歳前後に脱退するところが多く、その活動の中心は、小正月や雛祭り、七夕、地蔵盆など年中行事や祭礼に参加することである。

若者組は15歳前後から25歳頃、あるいは結婚までの間、村において家をかまえるいわゆる一戸前になるまでが普通である。若者組は土木や消防、祭礼など村でやる労働の中心を担うものであり、近代に入り国家の地方政策として青年団として組み込まれることになる。

中老組は戸主が中心であり村の運営の責任を負う世代であるが、それゆえに組織的な力は強くない。どちらかという、若者組の後見となることが多い。年寄組は隠居した人びとの集まりであり、講などをつくり宗教的な要素が強い。(鳥越, 1993, 148~158)

講と組

講は、「地域のなかで伝統的な資格などなく、各人がなにかの目的をもって結成した」(鳥越, 1993, 172)のものであり、必ずしも村の範囲内でかたまる必要はないが、村の大きさにあわせてできる場合が多い。講の本来的に宗教的なものを中心とし、伊勢講、庚申講、山の神講、田の神講、秋葉講、天神講、観音講、日待講などがある。これらの集まりは信仰的なものといえるが、実際は人びとが寄り合い、飲食して楽しむのが目的でもある。

それに対して、組は、鈴木の述べた3つの地区のうち第一社会地区にあたるもので、村の中で近隣の家々が集まった組織であり、必ずしも親縁関係に限定されず、「比隣四周の家並をもって、家々が一律的に一集団に編成される」(竹内, 1990, 188)村組や近隣組のようなものを指す。また、年齢階梯制で述べたように、若者組のように村の人びとが性別や年齢別に組織されるものも組と呼ばれる。そこで、本論文では、誤解が生じないように、組という場合は近隣の家々が集まった組織としてだけ指すことにする。

5 村で映像を撮ることの実際

5-1 玉梨村の構成と角田家

マス・コミュニケーション研究と村落研究の枠組みをクロスさせながら、奥会津（奥只見）、新潟県と福島県の県境の金山町の村で、自分の部落の人びとを60年近く撮り続けた角田勝之助の映像（写真）を、角田が村社会の関係性のなかで、どう写真を撮り続けていたかをみてみたい。

まず、はじめに金山町玉梨村の構成を近隣の組織である小字、組からみておこう。現在の玉梨村は、川上、上中井、東中井、西中井、湯ノ上で構成されている。江戸時代の玉梨村は川上と川下に分かれており、川上は現在の川上であり、川下は西中井と湯ノ上にあたる。上中井と東中井は中井村とされており、地形的には野尻川沿いに上流から下流にかけて右側に川上、上中井、東中井とあり、川を挟んで左側に西中井、湯ノ上となる。1875（明治8）年8月に玉梨村と中井村が合併し玉梨村になり、1889（明治22）年の町村制によって統合され行政村としては川口村となる。その意味では、玉梨村が大字であり、鈴木の区分にしたがえば、第二社会地区の村ということになるが、実質的には川上と、中井村の上中井と東中井、川下の西中井と湯ノ上の3つの村で構成されているといつてよい。

湯ノ上で角田家は同姓仲間の多い家である。角田勝之助の祖父角田長太郎は上中井の船城家のトヨと結婚し、養子として岩吉を迎え、その岩吉が角田家本家をつぐことになった。その後、長太郎とトヨは弥一を生み、弥一がスギノと結婚後分家し、勝之助が生まれる。

この湯ノ上は、西中井から大峯山にあがった中腹を開墾した11戸の小さな村で、水に乏しく畑作と林業、あるいは狩猟を生業とする。しかし、大峯山の裏には水量が豊富な白沢川上流の高野沢があり、この水を引くことで畑を水田化することができる。角田勝之助の祖父長太郎が中心となり湯ノ上村民は、1887（明治20）年から1901（明治34）年の15年をかけて、山腹にトンネルを掘り水路を作る工事がやりぬく。このトンネルである洞門から湯ノ上と西中井へ水路が引かれ、湯ノ上と西中井は水の管理運営をすることを通して、さらに村同士の強い結びつきをもつことになる。

玉梨村は大字として、共用林をもち共用林組合などをもち、道普請や祭礼などを行い、一つのまとまりをもっているが、西中井と湯ノ上は洞門を通した水利関係などがあり強い結びつきをもち、講なども2つの村で行うなど自律性をもつ。

5-2 メディアと村の組織との関係

ここで、角田勝之助などの聞き取り調査（榎本、2015）を参照しながら、1952（昭和27）年に初めて購入したカメラで撮影した1952年から1957（昭和32）年頃の写真である約700枚を中心に分析してみる。

角田勝之助が生まれたのは1928（昭和3）で、物心つく頃には家にはプリントした写真があったと思われる。川口国民学校を卒業した1943（昭和18）年頃に写真に興味を持ち始め、玩具のようなカメラなどで撮影し、翌年にはカメラを注文している。こうした時、写真（映像）についての情報源は新聞、雑誌、ラジオなどのマス・コミュニケーションであった。角田は写真の現像などの技術について本や雑誌で習っており、その後もラジオの製作、テレビの修理技術、ビデオなども本や通信講座などで学んだとしており、こうした中山間地域におけるメディアとの接触、利用の一つのあり方を示している。

実際に角田がカメラを購入し手にしたのは、敗戦後の1951年頃でその翌年から実際の写真が残されている。ところで、この角田がマス・コミュニケーションから映像（写真）の知識や技術を受容し、取り込み、自ら映像を製作する送り手へと変貌する時、それを受け入れる人びとは村の誰だったのか、地域におけるメディアの普及という観点においては非常に重要な問題といえる。

角田の最初の頃の写真を見ると、移された人びとは圧倒的に若い男女が多い。占領期のこの時期、日本全国で引き揚げ者なども多く村々では人で沸き返っており、玉梨村でも10代後半から20代前半の若い男女が多くいた。ところで、この地区では、玉梨村の近隣の八町村と学校が同じであったこともあり、青年団はこの二つの村で一緒に構成され約200人近くいた。これらの若い男女を中心とした青年団の活動は、戦争が終わった解放感もあり極めて活発であった。

角田がカメラを入手した1951年には26歳で、その翌年の1952年2月には湯ノ上の谷ヶ城コマノと結婚し、11月には長男・勝志をもうけている。青年団のなかでは、明らかに年齢的には上であり先輩格であったといえる。また、角田勝之助の父弥一は翌1953年には玉梨村の区長になっており、洞門を開いた家として村の中でそれなりの地位にあったことはいえらる。

しかしながら、角田の写真からはそうした家の格はうかがうことはできない。写真を見てすぐに気づくの

は、仲間との関係性である写すものと写されるものとの関係が重視されており、写す角田勝之助の個性より、写して欲しいという写される人びとの個々の思いが大切にされている。イニシアティブは、写す人間ではなく、写される側に明らかに移っている。既に述べたように、マス・コミュニケーションにおいてはマス（多くの人びと）を相手にするために、なんらかの一般解釈コードを映像に付与しないと理解不能なものになってしまう。そのことは、そのままマス・コミュニケーションにおいて送り手の側に表現のイニシアティブがあることと結びついている。マスから中間、パーソナルなコミュニケーションへと移行するにしたがって、写す側から写される側へと表現、表出のイニシアティブはゆるやかに移動していく。このゆるやかな移行の過程を中間的なコミュニケーションのなかで、どういう社会的意味を派生させているのかが、映像分析の一つの課題になる。

ここでは、写す側と写される側が出会う場所（トポス）に注目してみる。当時、青年団の会合は月2回程度、学校で集まり、その後、玉梨温泉に皆で入るのが楽しみであったというが、200人が一緒に入れる風呂があるわけではなく、外である橋の上などで待つ時間が男女の出会いの場になっていた。つまり、学校、橋と温泉の3つの場所は、スペース・メディアとして青年団の男女にとって出会いの場でもあり、そのまま写す人と写される人が出会う場所でもあった。村の若い男女にとっては、小さな頃からしっている間柄ではあったが、おめかしをして新たな男女の出会いを楽しむ場であり、写真はそうした自分たちの気持ちを高揚させる道具（メディア）としてもあった。角田の写真は、青年団の若者たちと寄り添うように村の男女を写し続けており、送り手である角田勝之助は写真を受け手である村のこうした若者たちに渡しており、角田の写真が若者たちの関係性の触媒のような働きをしていたことが分かる。

さらに、青年団は村でやるさまざまな仕事の中心であり、道普請や玉梨村の郷社である鹿島神社の祭祀や、夏の盆踊り、消防団など実質的に行っていた。角田の写真もそうした活動に併走するように、また、撮影し続けることになる。

ところで、青年団は村の伝統的な年間行事に関わるとともに、村の新たな楽しみを担う存在でもあった。青年団のメンバーが自ら村芝居を演じたり、巡業する旅芝居の一座を呼んだりということをしている。さらにはバンドを結成し、玉梨村だけでなく、他村へと演奏旅行をしている。角田勝之助はバンドマスターが妻の弟の谷ヶ城与四郎であったこともあり、芝居や音楽など、こうした青年団の文化的な活動に関わっていた。

こうした青年団の遊戯的なコミュニティとしての性格は、地域的な枠を持ちつつ、趣味や嗜好を共有した仲間・サークルとして、村の学校や広場などのスペース・メディアを活用した活動をおこなっていたことになる。そして、こうした青年団の活動を映像が媒介していることは、映像の利用、普及において、コミュニティの遊戯的側面から広がっていったことを明らかにする。

玉梨村において、映像の受容は年齢集団である若者組（青年団）を母体とし普及しており、家を中心とした家連合である同族組織から広がっていないことは注意する必要がある。当然のことながら、角田勝之助の初期（1953～1957年）の写真に自分の家族である妻や子供を撮った写真がないわけではない。しかし、家族の写真は限られており、さらには自らの同族・親類の写真も必ずしも多くはない。どちらかというの家を維持するために、近隣組織の組である湯ノ上、あるいは湯ノ上と西中井の人びとと協同する作業の写真が目につく。国有林からの春先の薪出しや屋根を葺くための萱刈は湯ノ上と西中井でのユイとしての作業であるが、そうした関係性をもとにして国有林の伐採作業などを請け負っていたことはみえてくる。あるいは、田植えや稲刈り、さらには結婚や葬式は近



隣の家々の集まりである組の協力をもとにしている。

写された映像は、親族的な関係性を軸に展開するというより、組としての協力関係を軸に広がっている。家族写真が「家」という枠が枷となり広がりにくい構造をもっているのに対して、近隣組織は家どうしの協力関係をもとにさまざまな社会的な関係性をつくりやすいことは、メディアのコミュニケーション・ツールとしての媒介性を発揮しやすいものだったといえる。

【参考文献】

Wiebe,G.D.,1952, 'Mass Communications', in E.L.Hartley and R.E.Hartley, "Fundamentals of Social Psychology", Alfred A.Knopf.

有賀喜左衛門,1969,「都市社会学の課題」『有賀喜左衛門著作集Ⅷ』未来社

有賀喜左衛門,1971,「村落の概念について」『有賀喜左衛門著作集Ⅹ』未来社

浅岡隆裕,2007,「地域メディアの新しいかたち」田村紀雄・白水繁彦編『現代地域メディア論』日本評論社

榎本千賀子,2015,「村」に暮らす、「村」を写すー角田勝之助(福島県大沼郡金山町)聞き取り『人文科学研究』136 輯

林進,1978,「社会的コミュニケーション・システムの変動と中間コミュニケーション」コミュニケーション研究会『社会的コミュニケーション・システムの変動』埼玉大学教養学部

原田健一,2013,「事例としての「にいがた」ー地域の映像をめぐる4つのフェーズ」原田健一・石井仁志編『懐かしさは未来とともにやってくるー地域映像アーカイブの理論と実際』学文社

岡田直之,1992,「現代社会のコミュニケーション構造」『マスコミ研究の視座と課題』東京大学出版会

岡田直之,2001,「合理的市民像の現代的文脈ー能動的受け手論をめぐる一」『世論の政治社会学』東京大学出版会

鈴木栄太郎,1968,『日本農村社会学原理(上)』(『鈴木栄太郎著作集Ⅰ』未来社)

竹内利美,1990,「組と講」『竹内利美著作集1 村落社会と協同慣行』名著出版

鳥越皓之,1993,『増補版 家と村の社会学』世界思想社

〈発表資料〉

題 名	掲載誌・学会名等	発表年月
映像アーカイブによる中間的コミュニケーションの分析	『人文科学研究』136 輯	2015 年 3 月